

# 象徴としての竜

——東洋と西洋との場合——

マックス・ブルコルター

## はじめに

京都の河原町通りにあるカトリック教会の窓は、一連のステンドグラスでできているが、その最後の窓には、聖・ミカエルが熊に似た正体不明のどっしりとした一匹の動物とたたかっている姿が描かれている。このステンドグラスの製作者はスイスの画家・H・STOCKER であるが、もとを正せば、氏が京都に持ち込んだものには竜が描かれていた。それは、スイスのとある教会の竜を参考にしたものであった。しかし、日本に滞在中、氏は自らの描いた作品に不安な気持ちを抱きはじめた。というのは、東洋の文化では竜は殺傷されるものではないという印象を持ったからである。結局、氏は竜の尾を切り落とし、熊に似たものにしたのだった。<sup>1)</sup>

この芸術家の判断は、次のような通念がもとになっていた。すなわち、西洋では竜は悪の象徴であって殺されねばならないものであるのに対し、東洋では逆に、それは善の勢力を代表しており、決して殺してはならないものであるということなのである。

本論文で筆者が明らかにしたい点は、こうした通念はあまりにも一面的である、ということなのである。言いかえるなら、竜に託された多様な象徴の意味が、東西いずれの場合についてもこれまで充分には論じつくされてこなかったのである。

## 序 論

西洋において竜ということばで表現される生き物の姿・形は、文化圏によっ

て異なっている。ヨーロッパ人が抱く竜の概念は、本来的には中世から受けつがれたものであり、そこにおいては竜はトカゲのような姿・形をしている。他方東洋では、中国の竜はヘビのような細長い胴体をもっており、竜としての本性はその細長い胴体にある。

竜の姿・形についての想像は千差万別であるが、それらを比較対照させ得るのは、ヘビという要素である。ヘビと竜とは相互につながりをもつものであり、さらには同じものであるとすら述べている文献がある。9世紀の中国の文献には、次のような記述がある。「竜とヘビとは関連があると学者のあいだでは思われている。」<sup>2)</sup> ヨハネの黙示録 12.9 において、「巨大な竜」と「年を経たヘビ」とは同一のものとみなされている。あるいはまた、竜はヘビが成長したものである、という考えも見い出すことができる。『述異記』では、水虺（みずへび）<sup>すいゑ</sup>が、どのようにして500年後蛟（みずち）<sup>みずち</sup>になり、千年後竜になるのか、また竜は500年後角竜（かくりゆう）<sup>かくりゆう</sup>となった後どのようにして千年後応竜（おうりゆう）<sup>おうりゆう</sup>となるのか、が述べられている。<sup>3)</sup>

同様の考えは旧約聖書・イザヤ書 14.29 のペリシテ人に対する警告の記述のなかに見られる。すなわち、「……へび (nachash) の根からまむし (zefa) が出、その子孫は飛びかける竜 (saraf meofef) となるからだ。」と記されている。古代メソポタミアにおいて竜はヘビを意味する 〈mush〉 という形容語をつけて表わされ、ヘビの一種と考えられていた。〈mushhusshum〉 というもっとも良く知られている竜が、ヘビとそれほど共通点をもたないにもかかわらず、このように呼ばれているのは、その一例である。mushhusshum はヘビのような頭部とふたまたに分かれた舌以外には、ヘビとの共通点はない。胴体はライオンのようであり、足には鳥のもつかぎつめがあり、そして尾はサソリのような<sup>4)</sup>である。

したがって、本論文では竜とヘビは交換可能なことばとして用いられており、また外国語で竜・ヘビに該当する語は、ギュメ・＜ ＞で示されるであろう。題材はヘビと Mischwesen(混合体)とに限定されており、この場合の混合体とはヘビの要素をその具象または名前においてもっているものを意味している。

東洋と西洋ということばの意味を、正確に定義するのは容易ではない。東洋

ということばで、中国、朝鮮、日本の伝統が言及されるであろう。西洋の伝統は、ヨーロッパキリスト教の伝統として定義されよう。だが、これはさまざまな文化と文化的影響との集合体であるので、他の地域の伝統をも考慮にいれねばならない。竜の姿・形を想像するさいに、ヨーロッパに大きな影響をもたらしたものの1つとして、まず聖書があげられよう。すなわち、このことはセム系の文化ならびに宗教を、さらにはペルシアの影響をも考慮に入れねばならない、ということを示している。ヨーロッパそれ自体に固有なものとしては、ギリシア＝ローマ、スラブ、ケルト、ゲルマンの伝統の影響が見い出せるが、こうした伝統は、キリスト教に統合されたか、ないしは公然あるいは非公然にキリスト教と並存してきたのである。

### 西洋における竜と竜退治者

#### 聖書的伝統

竜と戦う神や英雄の物語が見られる文化は沢山ある。西洋においてもっとも良く知られ、かつ、もっとも大きな影響力をもってきたと思われるものにヨハネの黙示録があり、とくにその12章をあげることができよう。すなわち、ミカエルとその御使たちが天の竜とその使たちにたたかいを挑み、ついには地上へ投げ落とす、という箇所である。ここにおいては、竜は「悪魔でありサタン」(12.9)であるものと同一視されている。つまり竜は、ミカエルと小羊によって代表される善に対抗する悪を表わしているのである。悪は最後には倒されねばならないが、それは年を経たへびとか悪魔、あるいはサタンと呼ばれている竜を、「火と硫黄との池」へ投げ込むことで完遂されるのである(20.7以下)。

ところで、旧約聖書においても神と竜とのたたかいが言及されている。竜ということば、ないしは、竜の呼び名が記されている箇所は以下である。yam<sup>5)</sup>(海；詩篇 74.13, 89.9, ヨブ記 26.12), tannin (竜；詩篇 74.13, イザヤ書 27.1, 51.9), Leviathan (レビヤタン；詩篇 74.14, イザヤ書 27.1, ヨブ記 3.8), Rahab (ラハブ；ヨブ記 26.12, 詩篇 89.10, イザヤ書 51.9), nachasch

bariach (逃げるへび；ヨブ記26.13, イザヤ書27.1), nachasch a'qalaton (曲りくねるへび；イザヤ書27.1<sup>6)</sup>)。さらに DAHOOD の訳文によれば、詩篇68.23における〈bashan, バシャン〉という単語もまた、この範疇に入るであろう<sup>7)</sup>。

竜は旧約聖書のある箇所では、征服されねばならない海を表わしており(詩篇74.13—14, ヨブ記26.12—13), また別の箇所では、制御されるべき海として述べられている(詩篇89.9, ヨブ記3.8, 7.12)。前者, すなわち詩篇74篇とヨブ記26章は、天地創造と関係がある。後者においては海は不断の脅威であり、警戒されねばならないものなのである。聖書に見られる竜という語の言いまわしの大部分は、ウガリット神話の中にも見つけることができるので、その記述を見てみよう。ウガリット神話において、たたかいは神々同士のあいだでなされる。ヤム(Yam)—それは、それ自身が一匹の竜であったり、あるいは複数の竜にとり巻かれている場合もあるが—は、バアルないしは、バアルに味方するアナト(Anat)と戦う。このたたかいは創造とは何の関係もなく、ただもっぱら神々に君臨する(それ故人間に君臨する)者が誰か、ということに的をしぼっている。つまり権威を得んがためのたたかいなのである。ヤムは尊敬される神であり、そのことはイルウ(EI)が彼に統治権を与えたがっているという記述によっても示される。だが彼の敵対者である嵐の神・バアルが勝利し、至上権を得る。おそらくこの物語は、海の方がいっそう脅威的な力をもつこと、それ故に征服されなければならない存在である、ということを暗示している。しかし、海はまた同時に、ウガリット人やフェニキア人にとって慈悲深い側面をもっていた。ヤムは、それに献げられる犠牲の種類からもわかるように、あるいはまた、後代フェニキアにおいてギリシア名でポセイドンとか海のゼウスとか称されたことからわかるように、崇められた<sup>9)</sup>。

このウガリットの神話から、宇宙の秩序(おそらく儀式も付随していたであろう)は、世界の重要な部分を海に委ねることで保たれていた、ということがわかる。しかしこの宇宙は常に脅威にさらされていた。と言うのも、混沌を生み出す力である海が、そこにはあったからである。神と竜とのあいだのたたかいに関する旧約聖書の物語のねらいもまた、宇宙を混沌から守るためのもので

あったことは明らかである。

しかしながら、旧約聖書ならびにウガリット神話における竜退治は、ヨハネの黙示録における竜退治と比べて大きな差異がある。前者において、海は打ちたたかれ、殺され、縛られねばならないものであり、つまり海は海の限界内にとどめておかねばならないものである。そうは言ってもこれらの物語では、海はやはり宇宙の一部である。一方ヨハネの黙示録においても、竜と水との関係は依然として明白である。すなわち、12. 15においては、ヘビが水を川のように口から吐き出したことが書かれている。しかし、竜が破滅して、新しいエルサレムと新しい地が現われたとき、黙示録21. 1によれば、「もはや海はなくなった」のである。ここにおいて、前者と後者の違いが明瞭に認められる。後者において、竜は悪の権化であり、撲滅されねばならないものなのである。したがって、新しい時代には海がない。前者に見られる古来の伝統のなかで、海は制御されねばならないものではあったが、それは決して根絶される対象ではなかった。

竜退治者に関して、これまで幾つかの異なった象徴が使われてきた。ウガリット神話において、バアルは「雲に乗る者」と名付けられる嵐の神であり、この言いまわしは旧約聖書において、ヤーウェに対しても使われている（詩篇68. 4）。バアルの獣性はおそらく雄牛であろう。この雄牛に形どってヤーウェはイスラエル（北王国）で礼拝されたが（列王紀上12. 28—30）、この風習は予言者たちによって、また後の時代になってからも猛攻撃を受けたのであった。

メソポタミアやエジプトの竜退治者については、もっと別の象徴が用いられている。バビロニアの神話『エヌマ・エリシュ (enuma elish)』において、神・マルドゥーク (Marduk) は女神・ティアマット (Tiamat) と戦うが、ティアマットの側には、〈Mushmahhu, Ushumgallu, Mushhusshum, Bashumu〉と言う名の竜が加わった、怪獣の一团が<sup>11)</sup>いる。ティアマット自身が、竜であるとみなされてはいなかったように思われる。<sup>12)</sup>彼女は塩水や海を表わしている。だが竜を創造したり、竜にとり囲まれるということが、彼女をこれらの生物と関連づけている。マルドゥークの武器は〈abubu〉と呼ばれるもので、それは疾風のことであるが、同時に竜をも示し得る。この神の獣性としての象徴は、

竜・Mushhusshum であり、そして彼の呼び名の1つが〈Ushumgal〉なのである。Ushumgal はスメル語で、竜のことである。<sup>13)</sup>

エジプトでは、太陽神・ラー(Re)と闇のヘビ・アペピ(Apop)とのあいだでたたかいが行なわれ、ヘビの王者で鎌首をもたげたヘビが、ラーに勝利をもたらし。また別の神話上の大戦闘では、オシリス(Osiris)とホルス(Horus)がセト(Seth)と戦う。セトの象徴は、元来ジャッカルにどこか似た動物であった。しかし後になってこの神は、ヘビ・アペピと混ざりあったために竜の姿になることができた。この混合を可能とした原因が、いくつか考えられ得る。それらの1つに、外面的には砂漠の支配者であったセトが異国の民の支配者でもあった、ということがあげられよう。このことはヒクソス王朝を築いた侵入者たちが、セトを至上神と認めたという事実を見れば明らかである。<sup>14)</sup>セトとのこのたたかいにおける勝利者は目(=太陽)であり、鎌首をもたげたヘビなのである。<sup>15)</sup>セト=アペピは、後代には悪の権化となった。<sup>16)</sup>

上記の神話において、竜は生命と秩序をおびやかす側の勢力にも、生命力を促進する側の勢力にも姿を現している。

このことは、メソポタミアにおいて神話それ自体から(マルドゥークの武器の外には)直接には表われていないが、神・マルドゥークの表象や名称を通じて明らかになった。エジプトの話では、敵対者はともにヘビとして描写されている。ここにおいて、ヘビは権威の象徴であることが理解でき、そしてまた権威の象徴としてのヘビは、どちらの側にも位置し得るのである。このような二重性の存在は、神話における竜の再解釈が必要である、ということを示唆している。竜は本来的には力を表わしているが、その力は単に生命を脅やかす勢力のみならず、生命を守る勢力をも表現しているのである。たとえば、エジプトではセト=アペピは悪の象徴になってしまったけれども、ヘビそのものは決して悪の象徴になることなく、ラー、ホルス、あるいはまたファラオの力の象徴でもあり続けている。

このことを心にとめながら、旧約聖書を別の視点から捉えてみよう。先述したように、海の竜の敵はヤーウェである。この神はヘビと関連があったということを示す箇所が、幾らか見い出せる。<sup>17)</sup>もっとも重要なものとして、列王紀

下 18.1-4 とイザヤ書 6.1-7 の2箇所があげられよう。最初のところでは、ヒゼキヤ王が「モーセによって造られ、人びとから拝まれていた」青銅のヘビ〈Nechushtan, ネホシタン〉を破壊したことが書かれている(18.4)。青銅のヘビと訳されている単語〈nachash hannechoshet〉は、荒野の物語(民数記21.4以下)において用いられている〈saraf<sup>18)</sup>〉と同じものである。この荒野の物語では、モーセはヘビ(saraf)にかまれた民を救うために、青銅で造られた saraf を仰がねばならないのである。一般に、この物語はネホシタンに対する原因譚と考えられている。モーセをめぐる他の物語も、彼をヘビと関係づけている。出エジプト記 4.2 以下(J・E資料)と同7.8以下(P資料)とには、モーセのつえがヘビ(4.2以下では nachash, また7.8以下では tannin の語が当てられている)になった、という記述が見られる。モーセのつえについては、他の箇所でも言及されている。おそらくこのつえは、ヘビの形をしたセプターであったとも考えられる。ヘビの形をしたセプターはこれまでに、エジプトとシリア=カナン一帯で見つけられた例がある。このことは、モーセを後になってヘビのつえと関係づけた別の伝承があり得る、ということを示唆するものである。いずれにしろ、神殿のネホシタンをモーセと関連づけた根底には、モーセの人物像を発展させた諸々の伝承があったと言える。ネホシタンとの関連で、モーセは、このヘビへの崇拝を正当なものと認めた。すなわち、モーセの名によって公認されたこの青銅のヘビ崇拝は、究極的には偶像としてのヘビが、ヤーウェと関係づけられたときにはじめて意味をもってくるのである。<sup>20)</sup>

イザヤの幻において、〈serafim, セラピム〉はヤーウェの上に立っている。この語は旧約聖書では数回用いられており、それぞれ「ヘビ、火のヘビ、竜」と訳されている。「火のヘビ」(hannachashim hasserafim) がヤーウェの名において民をおそったことは、すでに荒野の物語(民数記21.4以下)のところで言及した。民を救うべく、モーセは青銅の「火のヘビ」(saraf)を支柱の上に置くように命じられる。この火のヘビは申命記8.15とイザヤ書30.6とで述べられているように、荒野に棲息しているようだ。火のヘビは〈saraf meofef 飛びかける竜〉とも呼ばれている(イザヤ書14.29, 30.6)。saraf の本来の意味は、燃えることである。<sup>21)</sup>後世のエジプト人は、墓地の見張り番である翼

のはえた混合体の生物を、〈serref〉<sup>22)</sup>と言ひ表わしている。

セラピムのことが言及されている箇所（E資料、イザヤ書、D資料）すべては、大ざっぱに見てほしい同じ年代に当たる。イザヤが幻のなかで見たものは、彼の時代にはまったく異例の表象ではなかったのか、という憶測は当たらないし、セラピムが翼のはえた人間の姿をしていた可能性もほとんどない。というのは、こうした姿・形は、シリア北部＝メソポタミア一帯においては広く共通のものであるが、翼のはえた混合体としての生き物が重要視されるカナン＝イスラエルにおいては、そのような姿・形はいたってまれだからである。<sup>24)</sup>

これら混合体としての生き物には多種多様のものがあるといっても、しかしながら、ヘビに似た特徴をもつものはまれである。エジプトやパレスチナにおいて見出すことができるものは、主として翼のついたヘビ形章である。ヘビ形章はエジプトでは一対の翼をもち、またパレスチナでは、二対の翼をもっている。<sup>25)</sup>だがそうは言っても、イザヤの幻のなかのセラピムが翼のはえたヘビ形章に似ている、という JOINES が受け入れたがっているような結論を引き出すことは困難である。また他方、翼のついたヘビに似た生き物が、ヤーウェの上に立っていたのをイザヤが見た、ということ否定するのも困難である。

セラピムは、ヤーウェをほめたたえている。彼らは、ヤーウェの雄大さと栄光を讃美し、ヤーウェの仲介者としてふるまう。そのことは、イザヤがヤーウェに仕えるために、セラピムが媒介となって彼を浄める、という箇所に見られる（イザヤ書6.6以下）。セラピム自身は、このような目に見える力の象徴なのだろうか。竜を通じての力の誇示は、旧約聖書と相いれないものではない。エジプトやバビロニアの支配者たちは、ときには竜にたとえられている（イザヤ書30.7、エゼキエル書29.3、32.2、エレミヤ書51.34）。ペリシテ人のことに言及したおどしで、数人の統治者がヘビ、マムシ、あるいは飛びかける竜の性質をもつ者として、引き合いに出されている。<sup>27)</sup>

ヤーウェが少なくとも数回ヘビと関連づけられたことは、ネホシタンについての物語において、また翼をもつ火のヘビ（セラピム）の物語において明白である。後者、すなわちセラピムについては、おそらくヤーウェの力と栄光の表現であろう。このことが意味しているのは、メソポタミアやエジプトの伝統に



においてそうであるように、イスラエルにおいてもまた強大な力を表わすために竜の表象が用いられた、ということなのである。そしてさらには、この竜は、生命をおびやかす力としてだけではなく、生命を守る力としても使用されているのである。

しかしながら、ヨハネの黙示録における竜の表象にもどって考えるとき、この考えは当てはまらない。竜はなるほど力を代表している。9.19において、馬の力は、その鼻口部とへびに似た尾とにある。巨大な赤い竜の7つの頭と10の角(12.3)は、7人の帝王と10人の王を示している(17.9, 17.12)。海から上ってくる最初の獣の力は、竜によって生じたものである(13.2)。この獣は、666の数字が皇帝ネロと解されうるかぎりにおいて(13.18、ヘブル語では Neron Kesar)<sup>28)</sup>蘇生しつつある皇帝ネロを意味している。だが、力が竜において表わされているときですら、それは悪の力のみを代表しているのである。この表現はイスラエルの捕囚以前や捕囚期の考えとは相入れず、捕囚以後に現われたのであり、そしておそらくゾロアスター教の思想に影響を受けたものであろう。そこで、ゾロアスター教における竜退治を以下で一べつしておこう。

ゾロアスター教の經典である『アヴェスタ』において、英雄・スラエータオナ(Thraitauna)と竜・ダハーカ(Azi Dahak)とが敵対している。そこでは、この英雄がへびとのたたかいに勝利せんがために、さまざまな神に頼む箇所が見られる。『アヴェスタ』の「ホーム・ヤシュト(Hom-Yast)」では、スラエータオナは、竜・ダハーカを殺した者として名ざ<sup>29)</sup>されている。別の伝承によれば、彼は竜を殺すことができなかったもののデマーヴァンド山に捕えておくことができた、となっている。この物語では、竜は世の終わりの日に自らを解き放ち、善<sup>30)</sup>霊をもつ人類と家畜と獣とのうちで、おのおのの三分の一を破滅させるであろう、ということが予言されている。だが英雄・クルサーSPA(Keresaspa)は起ち上がり、竜を打ち滅ぼすであろう。このゾロアスター教の思想において、竜は悪<sup>30)</sup>霊をもつ被造物である。

実際、へびのすべては悪の被造物とみなされており、滅ぼされねばならないものである。ヘロドトスは、マギ(ペルシアの知者)たちが蟻、へびはもとより、その他の飛ぶものや這うもの一切を手当り次第に殺すということを書いた

とき、こうしたマギたちの信念に気付いていたのである。<sup>31)</sup>別の物語においても同様に、竜・ダハーカ (Dahaka または Dahhak) は悪漢であり、最初の王・イマ (Yima) をその王国から追い出し、自ら恐怖政治をとり行なったのである。<sup>32)</sup>フィルダウシ (Firdausi) によれば、英雄・ファリードゥーン (Faridun) が1千年の後ダハーカをその領土から追放しデマーヴァンド山に彼を閉じ込めた、<sup>33)</sup>となっている。

上述した英雄・ファリードゥーンは他の物語でも登場しているが、そこでは竜に変装して不安と恐怖をまき散らす。つまりこうすることで、彼は自分の息子たちの勇気を試したかったのである。一番末の息子がかつても勇敢であることを示し、そして後にこの息子が王になる。<sup>34)</sup>ここには竜に関する肯定的な視点もあった、という痕跡が見られる。すなわちそれは、竜が元来王権の象徴であったという可能性を与えてくれるものである。ヘビがもっぱら悪の被造物に属するというゾロアスター教の経典においては、竜は悪人の王だけを象徴していた。しかし上記の例を含め、このことはゾロアスター教の枠外では当てはまらないのであり、またパルチア影響下のアルメニアの一部にあった王朝が、竜の名をとって Azdahak と呼ばれた、という事実によっても示されている。<sup>35)</sup>これは、古代ペルシアの戦士同盟 (Männerbünde) に遡るものであり、そこにおいては竜を形どった鉄かぶとや旗が、<sup>36)</sup>そしておそらくダハーカという語も使用された。ダハーカは神・ワユ (Vayu) の呼称の一つであり、この神はゾロアスター教とは無関係の至上神である。WIKANDER はワユを「竜の戦士」と訳している。<sup>38)</sup>後代になって、同様なことがミトラの秘儀のなかに見出されるが、そこでの礼拝に集う団員は、「竜に仕える」ものと呼ばれた。<sup>39)</sup>ミトラの表象は、普通ヘビをしたがえている。<sup>40)</sup>また、ペルシア人が竜の軍旗を使用したことは、ローマ人の知るところである。<sup>41)</sup>

以上から、ペルシアにおける竜は元来悪の象徴ではなかったこと、あるいはまた、悪の力だけを象徴していたのではなかったことが理解できよう。それは、ゾロアスター教においてのみ悪の象徴となったのである。ゾロアスターの宗教体系は、どちらかと言えば抽象的である。すなわち、神々の代わりに霊的存在がいる。それは厳密に言えば二元論的であり、一方には善が、他方には悪が存

在する。ゾロアスター教の抽象的な原理は、きわめて早い時期に民間宗教の諸々の神と混合されたように思われる。<sup>42)</sup>その過程で敵（つまり戦士同盟）の象徴であった竜が、悪の本体になった。竜退治の伝統は残ったが、しかしそれに伴なう一大変化は、竜が悪の被造物の代表として打ち倒されねばならない存在になった、ということであった。

ゾロアスター教が国家宗教となった（紀元3世紀頃）ササン朝の時代を別と<sup>43)</sup>して、この宗教は大きな勢力になることはこれまで決してなかったが、その基本となる二元論的概念は、ユダヤ教ならびにキリスト教の諸集団に、すなわち後期ユダヤ教と初期キリスト教の時代の諸集団に、影響を与えたようである。この二元論はヨハネの黙示録において見ることができ、そこでも同様な、竜のたたかひの概念が用いられている。この源泉は旧約聖書（竜とたたかうヤーウェ）にまで遡ることができる。しかし、旧約聖書において本質的には力の象徴であったものが、ヨハネの黙示録においては、邪悪なものないしは暴力として、その表象の意味が変えられてしまったのである。

竜退治の伝統について、聖書における継承は二つの部分から成っていると見えよう。一つ目は、生命をおびやかす力に抗して宇宙を守る、という神話がそれである。だがこの神話では、竜において肯定的な勢力がもつ力と、否定的な勢力がもつ力の両方が見られる。二つ目は、ヨハネの黙示録において採用されている二元論の伝統がそれである。そこでは竜は、悪と暴力のみの代表となっているのである。これら二つの伝統が、ヨーロッパにおけるキリスト教に影響を与えたことは後で触れるが、二元論の方が強い影響を与えている。

### ギリシアの伝統

ギリシア神話においてもっとも良く知られている竜退治は、ゼウスと竜・テュポン（Typhon）とのたたかひである。テュポンは巨大な怪物で、東西に達するばかりでなく地上から天にまで達するほどである、と記されている。指の代わりに彼は100個の竜の頭をもっており、そして腰から下は何匹もの毒ヘビがとり囲んでいる。ゼウスは1回目のたたかひの後、彼をカシオス山（シナイ半島北西）に閉じ込めた。竜は自分で拘束を解いた後、ゼウスをもう少しで打

ち負かすまでにいたったが、ヘルメスとパン（別の伝承によれば、カドモスがパンに代わっている）の助けを得て、ゼウスは竜の上にエトナ山（シシリー島）を投げつけて勝利することができた。ゼウスに援助を差しのべた者のうち、カドモスは竜の退治者であり、神・アレス（Ares）の竜を殺している<sup>44)</sup>。また有名なもう一人の竜退治者はアポロンである。彼は雌の竜・デルフィネを打ち負かしたのだが、この竜はデルフォイの神殿を守り、また託宣を与えていた。別の伝承によれば、アポロンは雄の竜・ピュトン（Python）を殺したことになっている。アポロンがいかにしてデルフォイの託宣の神になったのかが、これら二つの勝利を通して説明されるのである。だがこの神話にもかかわらず、ピュトンはデルフォイの神殿にあるオムファロス（Omphalos）の下に埋葬された、ということである<sup>45)</sup>。

これら3人の竜退治者は、すべて竜と関係がある。ゼウスはヘビの姿でペルセポネと性交を行ない、ペルセポネは後にサバジ奥斯（Sabazios）を産んだ。サバジオスの礼拝において、ヘビは卓越した役割を担ったのだ<sup>46)</sup>。ゼウスの星座は〈drakon〉（竜）である<sup>47)</sup>。ピレウス（Piraeos）港一帯で、彼は Zeus-Meilichios と呼ばれ怪物のようなヘビの形で崇拝された<sup>48)</sup>。カドモスは、竜を殺したことで罰せられ、8年間アレスの奴隷として仕えた。彼と配偶者のハルモニアはヘビに変えられて、その形のまま極楽浄土・エリュシオン（Elysium）に着いた<sup>49)</sup>。アポロンは託宣を与えていた竜を殺した罰として、テッサリア（Thessalia）へ行って自分のおこないのために身を浄めねばならなかった<sup>50)</sup>。後に彼は Apollon-Pytho と呼ばれた<sup>51)</sup>。アエリアヌス（Aelian）によると、エピロス人（Epirotes）の居住地の近くにこの Apollon-Pytho をまつた聖なる森があり、そこに生息する竜の挙動を通して託宣が与えられたそうである<sup>52)</sup>。アポロンはヘビの姿で、ドリュオペ（Dryope）と交わった<sup>53)</sup>。

古代ギリシアにおいて竜は、セム種族の圏内で用いられたのと同じ様に用いられたことがわかる。すなわちそれは、破壊力と生命力の双方を表現したのだ。

## ゲルマンの伝統

まず、次の二つの事実を心に留めておかなければならない。一つには、ゲルマンの伝統はギリシアのものほど数が多いということであり、二つには、こうした記録の大部分は中世キリスト教の時代からのものである、ということである。<sup>55)</sup>

ゲルマン神話においてもっとも良く知られる竜退治は、トール (Thor) 神と 〈Midgardserpent〉 (ミドガルドのヘビ) とのものである。このヘビは地球をとり巻く海を表わしている。『Ragnarök (神々の黄昏)』において、トール神はヘビと戦い、そのたたかいに勝つのだが、しかし敵の毒気で死んでしまう。<sup>56)</sup>ヘビを征服した後に訪づれる竜退治者の死は、ゲルマンの伝統において広くゆきわたっている主題である。<sup>57)</sup>もう一つは英雄・ベオウルフ (Beowulf) の例で、彼は宝物を見張っている竜を打ち負かすことができたのだが、毒をもつ竜にかまれて負傷し、後に死ぬのである。<sup>58)</sup>

その他の英雄たちは、竜に勝利したことで特別な能力を得る。たとえばジークルト (Sigurd) は、竜の心臓から出る血をなめてから鳥のことばがわかるようになる。<sup>59)</sup>ジークルトは竜を殺したことがすべての者にわかるように、竜の紋章をつけていた。<sup>60)</sup>それ以外の点で、竜退治者をヘビに結び付ける記述はほとんどなく、ギリシアにおいて見られるようにはいかない。わずかに神・オーディン (Odin) において、似たような見解がある。<sup>61)</sup>オーディンはヘビの姿をとることができ、知恵の神として竜をどのように打ち倒すかを教える神である。

## キリスト教の伝統

カトリックの伝統では、約60聖人が竜の退治者であると信じられている。それらのなかにはイグナティウス・ロヨラ、レオ4世、ニコラウス、シルヴェステルのような、良く知られている人びとも含まれる。<sup>62)</sup>

初期のヨーロッパキリスト教にもっとも大きな影響を及ぼした竜退治者は、聖・ミカエルであった。3世紀から8世紀にかけて大天使の出現があいついで起こったが、そのことが原因となって、ミカエルを祭った聖地が小アジアから

アイルランドにまで建立された。これらの聖地は、ほとんどが海と隣り合わせのきり立った山に設けられ洞窟から成っているが、こうした洞窟はたいいてい、それまではキリスト教と無縁の神々が祭られていた場所であった。聖・ミカエルは、コンスタンティヌス大帝によって築かれた小アジアのキリスト教帝国の守護聖人になった。コンスタンティヌス大帝自身は、ミルヴィウス橋頭におけるマクセンティウスとのたたかいを回想するモザイク画のなかに描かれたが、そこでは彼の敵である竜を、王旗（Chrismon という、キリストの頭文字を組み合わせたモノグラムが印されていた）でつき刺した英雄として描かれたのである。このモザイク画は、聖人の竜退治であれ統治者の竜退治であれ、後代のすべての竜退治の場面において、その原型となったようである。<sup>63)</sup>ミカエルは後に、カール大帝下の神聖ローマ帝国の守護聖人になった。竜を殺そうとしている大天使・ミカエルを描いた旗は、キリスト教存続のための決定的なたたかいにおいて、キリスト教の軍隊の象徴となったのである。たとえば、732年のポアティエでのアラブ人に対するたたかい、あるいはマジャール人に対する二度のたたかい、すなわち933年のウンストルート（Unstrutt）と955年のアウグスブルク近郊でのたたかいとがそうである。騎士たちは彼らの盾にこの主題を用いた。ミカエルという名前は、ドイツにおいては特に広く用いられており、今日でもドイツ人を指す言い方の一つとして使われている語に、der deutsche Michel（＝Michael）（ドイツ野郎）というのがある。<sup>64)</sup>

キリスト教の伝統のなかで特にきわだった竜退治者は、4世紀に殉教した聖・ゲオルギウスである。彼について言い伝えられた伝説で、初期のものは竜とのたたかいに言及していないが、後期（竜と戦う聖人が最初に描写されたのは10世紀頃）になって、竜とのたたかいの物語が彼の伝説の主要部分となった。<sup>65)</sup>この伝説で彼は、リビア（Lybia）のシレナ（Silena）市をふるえあがらせていた竜を投げやりで負傷させ、その竜の人身御供となるはずの乙女を自由の身にするのである。そして彼は傷ついた竜を、市の中へ引きずって行く。市民たちは不安になるが、彼らが喜んでキリスト教徒になると、彼は竜を殺してしまう。彼自身はいかなる報酬をも受けず、通常あり得る英雄と姫君との結婚は、ここでは民衆の洗礼に置き換えられている。<sup>66)</sup>

この物語は、異教地域のキリスト教化が一人の騎士によってなされた様子を描いており、聖・ゲオルギウスが十字軍戦士たちの守護聖人になったのもうなずける。ある伝説によれば、エルサレムの城壁を前にした十字軍の兵士たちのところへ、彼がどのようにして現われ、そして城壁を征服できないでいる兵士たちをいかに勇気づけ、市を取るように促したかが語り伝えられている。彼はグルジア、ギリシア、ハンガリア、ポルトガル、スウェーデン、イングランドの守護聖人になった。竜の殺りく者として彼を描いた旗は戦闘のさいに使われたが、1735年のある資料によると、キリスト教の敵ならびに帝国の敵が、つまり竜が打ち倒されねばならない戦闘に対してだけ、この旗は使用されたとのことである。Sanct Jorge (聖・ゲオルギウス) というスローガンは、ヴィッテンベルクのたたかいのときに、プロテスタントの君主たちに抗するカール5世の軍隊によって用いられた。<sup>67)</sup> 君主や王の或る者は、戦勝記念に、「竜とたたかう聖・ゲオルギウス」として、自分の姿を描かせた。<sup>68)</sup> このことはもちろん宗教的・政治的な敵が、竜にみたてられていたことを意味するものである。

イエス・キリストもまた竜退治者として神学上解釈され、肖像もそのように描かれている。楽園物語に見られるヘビの頭を踏みつぶす「女の種」と、詩篇91.13で言われていること、すなわち神の庇護のもとにある義人はシシとマムシとを踏み、どう猛なシシと竜とを押しつぶすという箇所とが、竜を鎮圧するキリストへの予表になったのである。<sup>69)</sup> またイエスの洗礼は、竜とのたたかいとして解釈された。たとえばエルサレムのキュリロス(386没)は、次のように書き記している。「ヨブによると、ベヘモーテ (Behemoth) という竜がヨルダン川にいて、ヨルダン川の水は、この竜の喉を通して流れていた。この竜の頭を砕くときが来たとき、イエスは水中にもぐってその強大な頭の一つを縛った。このように我われは、サソリやヘビを踏む力をもっているのである。」<sup>70)</sup> 十字架上のイエスの苦難と死もまた同様に、罪と死とを表わす竜に対する勝利として理解された。この主題は巨匠ルーカス・クラナハ (Lucas Cranach) による絵においてすらとり入れられたが、彼はそれをルターやヴィッテンベルクの神学者たちと協力して作成したのだった。すなわち、丘の上でキリストは十字架にかけられており、その下にある第二番目の絵では、キリストが死を制圧

している。そして竜が十字架のやりをもっており、そのやりには復活の旗が据え付けられているのである。<sup>71)</sup>

最後に女性の竜退治者の一人、聖・マルタについて言及しよう。この伝説は12世紀に遡る。ローヌ川に人間を食う竜がいて、これはレビヤタンと Onachus (ガリア地方の怪物)の子であったが、聖・マルタによって制圧された。彼女は「聖水」をその竜に注ぎかけ、十字架をつきつけた。今やおとなしくなった獣を、彼女は自分の腰の帯で縛った。そこへ人びとが来て、その竜を殺したのだった。マルタを描いた絵には、通常、首輪のような形をした腰の帯を、首に巻いた竜が彼女のそばに描かれている。<sup>72)</sup> 竜がよろいを着けた重装備の騎士によって制圧されたのではないということ、そしてまた捕獲されはしても殺されなかった(少なくともマルタが殺したのではない)ということが、女性神学の立場からみて、この伝説に特別重要な意味を与えてきた。MOLTMANN-WENDEL<sup>73)</sup>によれば、「忘れられた女神、統合された女性」は欲望の構造を破壊する(家父長的意識)のではなく、代わりに彼女は本能の力を統合する(女家長的意識)<sup>74)</sup>のである。

キリスト教の伝統に加えて、錬金術とユダヤ教神秘主義といった、それぞれ別の伝統についても言及しておきたい。錬金術においてもまた竜は殺されなければならない者であったが、しかしこれで終わるのではなくて、その死は元始の物質が金に変質するさいのはじまりなのであった。あるいはユングの精神分析によるなら、それは潜在意識が意識に統合されるさいのはじまりを意味していた。<sup>75)</sup> またシャブタイ・ツヴィ (Shabbatai Zwi) にまで遡ることができるユダヤ教神秘主義の伝統において、mashiach (メシア) は地獄の大蛇 nachash を打ち倒さなければならなかった。しかし、数の上から考えると、mashiach と nachash の数値は同じ (358) であったので、mashiach 自身は「聖なるへビ」<sup>76)</sup>と称された。

### 東洋における竜と竜退治者

中国・古代における一組の男女・伏羲と女媧<sup>ふっぎ じょか</sup>(兄妹)は竜であった。彼らは、へビの尾がからみ合った姿で表わされている。大洪水のときに、雌の竜・女媧



は天を補修した。さらにまた彼女は宇宙を救うために黒竜を殺した。

地上が洪水に見舞われた同様の物語で、禹帝（伝説上の皇帝）は水を海へ流れ込ませるために地面を掘った。そして竜とへびを低湿地へ追いはらった<sup>77)</sup>。禹帝自身は竜であった<sup>78)</sup>。これと同じ話で別の伝承では、彼は竜・応竜によって助けられている。応竜がその尾で川を記すと、水が流れ去っていくのである<sup>79)</sup>。また別の伝承では、応竜は<sup>こうてい</sup>黄帝（神話上の皇帝であり神でもある）のために、大雨を放つとおびやかしていた大蛇の<sup>しゅう</sup>蚩尤と戦った<sup>80)</sup>。応竜は雨を降らせるその竜を殺してから、<sup>せんがいきよう</sup>『山海経』によれば、水を南方にもっていったそうである。華南で雨が多いのはそのためである、と伝えられる<sup>81)</sup>。

川の氾濫に国土がおびやかされるという物語はその他にもあり、統治者たちが川の竜と戦っている。蜀郡の長官であった<sup>りひよう</sup>李冰は、毎年その地域に洪水を引きおこしていた竜・蛟を殺した。李冰は後に竜神として崇められたが<sup>82)</sup>、この主題は数多くの民話のなかに見られる<sup>83)</sup>。川の竜と戦うもう一つのやり方は、兵士たちを送り込んでドラを打ち鳴らしたり、矢を放ったりして川の竜を驚かし、水を退かせようとするものであった<sup>84)</sup>。別の民話では毎年へびに人身御供（たいていは若い娘）を捧げねばならなかったことが伝えられているが、結末では英雄がへびを殺すのである<sup>85)!</sup>。

もし竜が仲間同士で争うなら、それは通常、凶兆と考えられた<sup>86)</sup>。紀元579年に黒竜が白竜に殺されたが、このときの王朝を代表する色が黒であった。これはその王朝の崩壊を予兆しており、そして2年後にそれが現実となった<sup>87)</sup>。

要約すると、中国における竜は水と力とを表象していた。洪水の脅威的な力ばかりでなく、また脅威をさし止める相手方も竜として見られていたのである。

朝鮮の民話においても同様に、国を破滅させると言っておびやかすへびに、ならわしとして若い娘を犠牲に捧げる、という物語がある<sup>チエジユド</sup>。済州島にあったものでは、一人の行政長官がこの嘆かわしい風習を終わらせようとして、へびを銃で打ち殺した。たたかいからもどると、天から血が降ってきて彼にかかり、そして彼は死んだ<sup>88)</sup>。

日本神話に出てくる<sup>すきのおのみこと</sup>須佐之男命と<sup>やまたのおろち</sup>八岐大蛇とのたたかいには、若い娘の犠牲

をめぐって同様の主題が見られる。征服者・須佐之男命は、研究者たちによれば、ヘビとのことである。<sup>89)</sup> また、脅威を与える大虬<sup>みづち</sup>についての物語において、笠臣<sup>かさのおみ</sup>の祖である縣守<sup>あがたもり</sup>は、川嶋河で大虬とその仲間の生き物すべてを殺した。<sup>90)</sup> 伊吹山の神にたたかいを挑むつもりであった日本武尊<sup>やまとたけるのみこと</sup>の物語では、彼が神に出会ったとき、神は大蛇の姿をしていたために、日本武尊はそれを神と悟れなかった。その後の悪天候のなかで彼は病気になったが、その天候は神の仕業によるものだった。結局彼は死んだ。<sup>91)</sup> またある民話には、池のヘビ神に妻として差し出された若い娘の話があり、彼女は水の中に千本の針を投げ入れて、そのヘビ神を殺してしまうのである。<sup>92)</sup> 最後に能「江ノ島」について言及したい。すなわち、ここでは生命をおびやかす竜は、仏教のヘビ神・弁天によって制圧されている。弁天は竜と夫婦になる気がある。それで、災いは転じて福となる。<sup>93)</sup>

要約すると、竜は日本においても殺され得る。須佐之男命の物語では、征圧者とその敵は、両者とも竜とみなし得る。脅威を与える水の神々は殺されるときもあるが、弁天の場合のように、別の竜神によって変えられることもある。

### 竜退治と竜退治者についての注記

竜退治の物語は、西洋と東洋との両方にあることをこれまで見てきた。しかしながら、これらの数は、西洋の伝統における場合の方が多くある。

セム系ならびにインドヨーロッパ系の伝統のうち、竜退治が新年の祝祭の一部をなしている例がある。竜に対する勝利は、混沌の勢力が撃退され宇宙がもう一年安全に守られる、ということを意味するのである。中国の洪水制圧の物語のなかにもまた、太古の時代を投影しているものがあるが、それらの物語に見られる竜退治がかつて儀式において機能を果たしていたかと言う点については、筆者の知るところではない。

エジプトでは竜の姿をした敵手は、竜退治の神話では悪と呼ばれ得るような例があるけれども、竜それ自体は悪の象徴に徹していたのではなかった。それは他の神々の象徴でもあり続けていた。

このことがもっとも顕著なのは、竜と戦う神や英雄自身が、竜の表象によっ

て描かれ得るような伝統があるということである。これまで見てきたもののなかでは、この例として、エジプト、メソポタミア、旧約聖書、ギリシア、中国があげられるが、さらには、おそらく日本もこの例となろう。

ゾロアスター教と黙示文学の伝統においてのみ、竜は唯一、悪の象徴になっている。これは上記の伝統において、二元論的概念と呼ばれている思想と相まって発展してきたものであるが、たとえばヨハネの黙示録で見られるように、この二元論はヨーロッパ・キリスト教における竜退治に関する伝統のなかで、強い影響力をもったのである。だがヨーロッパ・キリスト教における二元論とその発展の問題を論ずるまえに、竜を肯定的に捉えているキリスト教の伝統を以下で見ておきたい。

### 竜をめぐるキリスト教の他の伝統

後期ユダヤ教の時代に、竜は来たるべきメシアの権威の象徴として用いられていた、という例がいくつか見られる。セプトゥアギンタにおいて、イザヤ書14.28 以下の竜の血統は、来たるべきメシアであると考えられた。<sup>94)</sup> ヨハネによる福音書においても、旧約聖書の伝統を自由にとり入れている。すなわち、荒野物語（民数記21.5以下）においてヘビが高く上げられたのと、人の子が十字架に上げられた（ヨハネ3.13以下）のとを関連づけている箇所がある。この予表はキリスト教思想において重要な意義をもったのであり、バルナバの手紙12.5 以下や教父たちの著作において、この予表への言及がある。<sup>95)</sup> 4世紀ミラノのアンブロシウスは、「木に吊り下げられたヘビ」のことを語っているが、彼はキリストをヘビと直結させている。<sup>96)</sup> キリストとヘビとのこの同一視は、またキリスト教美術においても表現されている。<sup>97)</sup>

他の例では、竜が依然神と関連があり得たことを示している。ギリシア＝ローマ時代のユダヤ教において、特に第二神殿の崩壊後、ヘビとの混合体である生き物から成っている魔よけが普及した。さまざまな表象は Iao, Sabaoth, Iao Sabaoth Adonai, ミカエル等と名付けられた。<sup>98)</sup> また太陽、月、竜、あるいは人の顔で、神を表象することを禁じているミシュナーやゲマラの禁令も、このような表象が広く行きわたっていたことを、逆に立証するものである。<sup>99)</sup> 象徴の一

つとして使われていたものに〈ouroboros〉があったが、これは自分の尾をかむヘビのことである。キリストの頭文字を組み合わせたモノグラムのついた、<sup>100)</sup>ほぼ同時代の ouroboros の表象が、カルタゴで発見された。

中世において、聖書の写本は竜の絵で図解されたが、<sup>101)</sup>このことは竜が聖なる文書に用いてはならないほど汚れた生き物ではなかったことを示すものである。竜は大聖堂にも広く用いられたが、とくにこの形に作った屋根の水の落とし口に、魔除けとして使われた。

社会的な権威の象徴としてもまた、竜は中世ヨーロッパにおいて重要であった。この起源は、一部にはローマ帝国の時代にまで遡ることができるかも知れない。そこでは、皇帝は竜を自分の象徴として用いたし、軍隊は竜旗を使用し<sup>102)</sup>た。さらにローマの記録文書から明らかなのは、ランゴバード人、バンダル人、アングル人、フランコニア人は、軍隊を表わすしるしとして竜を使用していた<sup>103)</sup>ということである。これについてはケルト人、サクソン人、ノルマン人も同様であった。<sup>104)</sup>ノルマン人は、彼らの船首を竜の頭で形どっていた。ベイユの壁掛け（1080年頃）には、ハロルドと彼の部下が竜の頭を形どった船に乗っているのが見えるだけでなく、竜を描いた盾をもつ騎士も見え、あるいはまた、本営前には二本の竜旗も見える。<sup>105)</sup>伝説によれば、アーサー王の父であるユーザー・ペンドラゴン（Uther Pendragon）（竜の頭の意）は、火を吐く竜が空を飛ぶ幻を見たが、それは彼が将来王になる意味だ、と解き明かされた。王になってから彼は、金でできた竜を二つ造らせたが、そのうちの一つはウエストミンスター大聖堂に寄進され、他の一つは自分が所有して、戦闘の際に持ち歩いた。竜のしるしは、イギリスの王たちのたたかひの旗じるしとして残った。たとえば、リチャード1世は十字軍のさいに、竜のしるしの付いた旗を持ち運ばせし、またヘンリー3世は、彼がウェールズ人とたたかった1245年にそれを掲げ<sup>106)</sup>た。

古代フランス語で *dragon* は獣のことであるのと同様に、旗<sup>107)</sup>のことである。後にこのことばは、竜の頭をしたマスカット銃に対して使用され、そしてこの軍用語は *dragons*（竜騎兵）へと至った。<sup>108)</sup>

竜が社会的権威を代表しているという上記の例では、竜は威力のある恐るべ

きものであるが、悪なのではない。

ヨーロッパのさまざまな地方では、ヘビは近代になるまで家の善霊として崇められてきた。このことはドイツ語圏において当てはまる（ボヘミア、フォクトラント（Voigtland）<sup>109</sup>、南ドイツ、スイス、オーストリア）。ドイツ語においてまた、意地悪な女性のことを Hausdrache（家の竜）と称する。これら二つの例は、家の善霊と悪霊は同じ心象で理解され得た、ということを示すものである。

ヨーロッパのさまざまな伝統において、竜は邪悪さのみを含意していたのではなくて、両面価値の象徴としてみなされていたことは明白である。

### 竜をめぐる東洋の他の伝統

東洋には竜についてのさまざまな伝統がある。だがここでは、水と社会的権威に関係のあるものだけにとどめたい。これら二つの関係は『易経』にすでに出ているので、この書物から始めよう。

「乾」<sup>けん</sup>の6本の線において竜は雨を降らす者であり、かつ「偉大な者」を意味している。一番下の線では竜はまだおおい隠されたままであり、そのことが示しているのは、まだ雨が降ってはおらず偉大な者が姿を現わしていない、ということである。第二から第五の線では竜は空へと登って行き、そしてその目に見える効果——つまり雨または偉大な者による影響——が、順次増し加わる。一番上の線では、竜はあまりにも高く舞い上がってしまう。つまり雨は地上に届かず、偉大な者は他の人間たちからあまりにも遠く隔たっており、統治者としての彼は暴君になるのである。<sup>110</sup>

『易経』においては、慈雨と精神的・政治的指導者を意味し得た偉大な者についての人間の経験が、目にみえる姿をとっている。雨は一定時間、適切な量で降ることは可能であるが、枯渇の恐れがあることもまた事実である。偉大な者たちは国家と同胞に利益をもたらすことはあり得るが、しかしまた家臣の福利に無関心であったり、ときには暴君とすらなり得ることもある。水と社会的権威において本来備わっているこのような両面価値は、『易経』において竜を象徴とすることで表わされているのである。

水と慈雨についての両面価値は、他の伝統においても見い出すことができる。洪水の脅威とそれらの対処の仕方については、すでに見た。枯渇のときは竜の職務怠慢のせいにされることがときどきあり、そのさい、雨乞いの祈禱が竜神たちに向けられるか、あるいはまた竜を空へ上らせようとして、竜が嫌っているものを池に投げ込む<sup>111)</sup>か<sup>111)</sup>なされた。しかし通常、竜たちは職務を遂行したし、それ故、慈悲深いものとみなされ崇められた。

『易経』において表われている偉大な者についての両面価値もまた、他の文献や伝統のなかに見い出すことができる。竜が皇帝の象徴となっていた中国において、皇帝の統治は竜の挙動に映し出されていると考えられた。悪政がもとで竜・ヘビの災いが起った。皇帝が道 (Tao) に従った統治をすれば、竜と不死鳥が吉兆として現われた。<sup>112)</sup>朝鮮と日本においても同様に、竜は前兆としてみなされた。日本では885年に「竜星」が出現したことで、年号が変えられた<sup>113)</sup>のだった。皇帝の行ないのみならず、役人たちのふるまいも、あるいはまた国民の不安<sup>114)</sup>ですらも、竜の挙動に映し出された。

最後に、東洋における竜の表象に関する仏教の影響を見ておきたい。インドのナーガ (naga, 竜) 王たちをめぐる物語は、大乘仏教とともに、中国、朝鮮、日本へ伝来した。インドにおいてナーガは両面価値的性格をもつものである<sup>115)</sup>が、大乘仏教の伝統では、ナーガは仏教にとって非常に好ましいものとして描かれている。ある伝説によれば、naga Mucilindaは仏陀が雨にぬれないように、自分のとぐろ巻きと、かさ状の頸部とによって7日間雨を防いだ、とのこと<sup>116)</sup>である。ナーガはまた真なる教え——つまり仏教——の守護者にもなった。<sup>117)</sup>別のナーガは未来の仏陀と称されている。ナーガはインドにおいて水と関係があった。それ故、雨をもたらす者でもあった。このことは、ナーガが中国の四つ足の竜と混り合うことを容易にした点である。<sup>118)</sup>

## 二元論の発展

ここでは、二元論とその発展について、もう少し考えてみたい。

二元論が見い出せる第一の例は、ペルシアにおけるゾロアスター教の思想である。既述したように、戦士同盟のもつ宗教体系は、竜を両面価値の象徴とし

てその体系内に組み込んでいる、他の諸体系と類似している。ゾロアスターに遡る伝統においてのみ、竜は一方の側だけの象徴と考えられている。善神と悪神とから成る体系の提唱者・ゾロアスターは、戦士同盟の伝統のある部分を非難した。すなわち彼は、雄牛の犠牲と神酒・ハオマ(haoma)を飲むことを斥けた。家畜に対して示されるこの思いやりは、彼が牧夫や農夫たちの味方であることを示すものである。牧夫たちは戦士たちのもとで苦しんだがゆえに、戦士同盟に関連のあるもの一切を拒んだように思われる。アーリマンの悪の世界が確実に消え失せるであろうという期待は、後代になって竜退治の伝統のなかで表現された。<sup>119)</sup>

ある特殊な社会的・歴史的状況が、この新しい世界観を産み出しているように思える。敵にいかにして対処するのかという問題は、ここでは敵を悪霊の支持者に変えることで解決されたし、また敵は悪霊とともについには滅びるであろうとされた。悪と邪悪な者たちとへの不断の憎しみは、この新しい教えを支持する者の、宗教的な務めとされたのであった。

後期ユダヤ教の伝統とキリスト教の伝統とにおいて、同様の二元論が見い出せることはすでに見た通りである。まず最初の例は、サムエル記下24.1で記されているヤーウェという語は、歴代志上21.1においてはサタンという語に変えられている、という事実である。そこではヤーウェに代わって、サタンがダビデを試す者となっている。国民の一部滅亡(イスラエル王国)という打ちひしがれた経験や捕囚、さらにはまたヘレニズム・ローマ時代の新たな辛苦は、二元論的傾向を助長した。この傾向が最も顕著に見られるのは黙示文学においてであり、そこでは悪を征した善の終局的勝利が予言されている。キリスト教ではヨハネの黙示録において、このことが竜に対する勝利として描かれたが、この場合の竜は悪魔・サタンを象徴していた。黙示文学の由来をどの集団に辿るかはかなり難しい。だが黙示文学的観点が見られるクムラン教団のなかに、エルサレムの支配層に反対していた一派がある。その開祖は、「義の教師」と呼ばれており、また彼らは自分たちを「神に仕える祭司」と称している。<sup>120)</sup> 彼らはエルサレムでの礼拝における祭司たちと対比して、自分たちのことを真の祭司とみなしている。ヨハネも同様に、黙示録においてキリスト教徒たちを「神の

ための祭司」(1.6)と呼んでいる。ここには自らの立場を義とし、他者を悪とする強い確信が明白に現われている。

二元論は、社会の末端部分にいた下層の人のびとが、実際に人生において体験した苛酷な事柄を語る方法であったように思える。それは、自らの向上を(近い)将来に置いた投出作用によって、現実の状況を耐え易くしようとするやり方であった。この方法は神話の言い回しのなかに組み込まれて残り、(人間とは)別の力の介在が期待された。だが、悪と悪を支持する者に対して戦えというゾロアスターの教えから同時代の信仰者たちは、少なくとも幾分かは行動的であったことは、明らかである。そして、とくに後になって、悪に属する生き物一切(へびを含む)がマジによって殺されるということにおいて、このことは明らかである。同じ例はルカによる福音書10.18以下において見られる。「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう！」

こうした考え方は、それを支持する者たちが権威の外にとどまっている限り、霊的なまま存続し得る。しかしキリスト教の歴史は、こうした考え方の信奉者たちが、ひとたび力を握るとたちまちあらわれる二元論の概念に固有の危険性を、あまりにも明瞭に示している。本来、殉教を意味していた霊的たたかいは、信仰者たちによって、自己の政敵に対する肉のたたかいへと変えられてしまうのである。STEFFEN は、霊的たたかいを取り違えそのたたかいが政敵へと向けられるこの混乱を、「キリスト教の原罪の一つ」と言っている<sup>121)</sup>。

ゾロアスターの教えにおいて、相反する二者から成る、すなわち善と悪の二つの霊から成る二元論の概念の背後に、二者の父である神・アフラ・マツダの統一があった、という痕跡が見られる。すなわち、アフラ・マツダは、もともと善と悪の両方を具現していたのだが、後になって主として善神となり、その結果二元論へと吸収されていったのである。<sup>122)</sup>

同じことは、ユダヤ教とキリスト教との教義についても言い得る。サタンは本来天使であり、対のもう一方であるミカエル同様に神の被造物である。SCHAERF は、サタンやミカエルを「神の位格化された職能」と言っており、



それらは天の宮における神のさまざまな様相を表現していると言う。<sup>123)</sup> ヨハネの黙示録では、サタンとその使たちとの墜落に関する後期ユダヤ教の物語が取り上げられている。訴える者 (12.10)・サタンとその使たちとが、天から投げ落とされるのである。封印を解く前の段階で、神は万物を在らしめる創造者としてほめたたえられている (4.11)。ここでの基本的争点は、キリストとサタンとのあいだにある。これを「疑似二元論」と言うことができよう。<sup>124)</sup> しかし、神がまったくキリストの側にあり、竜はどこからか姿を現わしているとき (12.3)、このたたかいを純然たる二元論として理解することは可能である。

悪についての二元論的解釈は、しかしながら、各種の公会議でしりぞけられた。たとえば、ブラガ (Braga) の管区協議会 (561) は、悪魔 (devil) は元来御使であって、自己の不服従とおごりとによってのみ悪魔になるのだと主張した。第4回ラテラノ総会議 (1215) は、悪魔に加えて魔神 (demons) もまた神の被造物であり、後になってから自分で悪に変わるのだと宣言した。第2次ヴァチカン総会議<sup>125)</sup> までずっと、すべての公会議がこれをくり返し明言してきた。しかし、こうした公認の教義とは別に、二元論的概念はキリスト教徒の一般的意識<sup>126)</sup> のなかに定着しているように思える。

## 要 約

象徴として竜は普通、両面価値の性質をもっている。このことは、水と社会的権威との関連で示すことができた。(もちろんこの象徴は、本稿で取り上げていないはるかに多くの含意をもっている。) この両面価値という枠のなかで、竜は西洋においてもまた東洋においても殺され得た。

しかしながら、西洋の伝統では、両面価値の性質は二元論的伝統によってくずされた。竜は、主として、悪を象徴するようになった。だが指摘されたように、両面価値の伝統が、それと並んで存在しているのである。

(西村裕美訳)

## 注

- 1) 筆者はこの話を、芸術家・H. Stocker の隣りに住んでいる F. Buri 教授から伺った。このことはまた筆者の博士論文 “Der Drache. Das Symbol und der Mensch”,

- 1981, を書く際の出発点ともなった。
- 2) M. W. De Visser, *The Dragon in China and Japan*, 1969 (1913; 1), p. 75.
  - 3) M. W. De Visser, *op. cit.*, 1969 (1913; 1), p. 72. 参照。
  - 4) H. Gressmann, *Altorientalische Texte und Bilder zum AT*, vol. 2: *Illustrations*, 1909, 96図, Marduk の足もとには 〈mushhusshum〉がいる。pp. 58 f. 参照。
  - 5) 〈yam〉という語はさまざまな箇所で見られるが、問題は「海の竜」を意味するのか、あるいは単に「海」のことを言っているのかを、箇所毎に決定するのが困難である、という点にある。同じことが〈tehom〉についても言える。この語は女神・Tiamat (バビロンの) の名前と同じであるが、しかし、おそらくたいていは、単に「海、大古の海」を意味するものと思われる。掲げられた箇所は、海が竜の姿・形でみられているということを常にパラレルで明らかにしている。
  - 6) M. Burkolter, *The Serpent in the Bible and Near Eastern Religions*, in: *International Christian University Publications IV-B, Humanities, Christianity and Culture*, vol. 19, Nov., 1985, pp. 22 ff. 参照。この論文では、重要な箇所はすべて省略なしに与えられている。
  - 7) M. Dahood, *Psalms II*. 51—100, 1968, p. 145. 参照。
  - 8) R. Labat, A. Caquot, M. Sznycer, M. Vieyra, *Les religions du proche-orient asiatique*, 1970, pp. 380—435. 参照。
  - 9) H. Gese, M. Hoefner, K. Rudolph, *Die Religionen Altsyriens, Altarabiens und der Mandaeer*, 1970, pp. 134 f. 参照。
  - 10) H. W. Haussig (ed.), *WBM* 1, p. 260. 参照。
  - 11) 〈mush〉という決定的な語がないときでさえ、〈Bashmu〉がへびの形をしているということは、神々の表象を表わした文献から知ることができる。そこには Tispak がへび・Bashmu を踏みつけている描写が見られる。H. W. Haussig, *WBM* 1, 1965, p. 93. 参照。
  - 12) A. Heidel, *The Babylonian Genesis*, 1951, 2, pp. 83—88. 参照。; G. Widengren, *Religionsphänomenologie*, 1969, p. 139. 参照。
  - 13) M. Burkolter, *op. cit.*, 1981, p. 58, pp. 118—121. 参照。
  - 14) M. Burkolter, *op. cit.*, 1981, p. 123. 参照。
  - 15) R. T. R. Clark, *Myth and Symbol in Ancient Egypt*, 1959, pp. 222 f. 参照。
  - 16) H. W. Haussig, *WBM* 1, 1965, p. 308. 参照。
  - 17) 以下では、M. Burkolter, *op. cit.*, 1985. の論点の要約が与えられる。
  - 18) P. Weimar, *Die Berufung des Mose*, 1980, pp. 228, 237, 316, を参照。彼は、Yahwist と Elohist とを用いて新たな一貫した表現を作り出そうとする Yehovist を、比較的最近の編集構成と考えている。彼は、それを Manasse の時代、すなわち7世紀前半のものとしている。
  - 19) M. Burkolter, *op. cit.*, 1985, pp. 10 f. 参照。

- 20) V. Fritz, *Israel in der Wüste*, 1970, p. 94. 参照。
- 21) W. Gesenius, *Hebräisches und aramäisches Handwörterbuch*, 1905, pp. 725 ff. 参照。
- 22) A. Schoors, *Isaiah, the Minister of Royal Anointment*, in: *Alttestamentliche Studien*, vol. 10, 1977, p. 95. 参照。
- 23) K.R. Joines, *Serpent Symbolism in the Old Testament*, 1974, p. 45. 参照。
- 24) K. Galling (Hrg.), *Biblisches Reallexikon* (BRL 2), 1977, *Mischwesen* の項, pp. 224 ff. 参照。
- 25) K. Galling (Hrg.), *op. cit.*, *Schlangen* の項, p. 281. 参照。
- 26) K.R. Joines, *op. cit.*, 1974, pp. 52 f. 参照。
- 27) O. Kaiser, *Der Prophet Jesaja*, Kap. 13—39, *ATD* 18, 1973, pp. 44 f. 参照。
- 28) E. Lohse, *Die Offenbarung des Johannes*, *NTD* 11, 1976, pp. 81 f. 参照。
- 29) H. Lommel, *Die Yaest's des Awesta*, 1927, pp. 35, 59, 151, 163, 188. 参照。
- 30) A. Olrik, *Ragnarök*, 1922, p. 345 f. 参照。
- 31) G. Widengren, *Die Religionen Irans*, 1965, p. 113 f. 参照。
- 32) A.J. Carnoy, *Mythology of All Races-Iranian-*, 1964 (1917; 1), pp. 311 ff. 参照。
- 33) A.J. Carnoy, *op. cit.*, pp. 320 ff. 参照。
- 34) G. Widengren, *Religionsphänomenologie*, 1969, p. 249. 参照。
- 35) G. Widengren, *Das Prinzip des Bösen in den östlichen Religionen*, in: *Das Böse*, *Studien aus dem C.G. Jung-Institut*, Zürich, 13, 1961, p. 36. 参照。
- 36) G. Widengren, *op. cit.*, 1961, pp. 35 f. 参照。
- 37) S. Wikander, *Vayu I*, 1941, p. 74. 参照。
- 38) S. Wikander, *op. cit.*, 1941, pp. 8, 41, 73 f. 参照。
- 39) G. Widengren, *op. cit.*, 1965, pp. 42 f と annotation 25. 参照。
- 40) H.H.v.d. Osten, *Die Welt der Perser*, 1956, p. 114. 参照。
- 41) T. Klauser (ed.), *Reallexikon für Antike und Christentum*, vol. 7, 1969, *Feldzeichen* の項, コラム 697. 参照。
- 42) G. Widengren, *op. cit.*, 1965, p. 94. 参照。
- 43) W. Wikander, *Feuerpriester in Kleinasien und Iran*, in: *Skrifter utgivna av Kungl. humanistiska vetenskapssamfundet*, 40, 1946, p. 176.; G. Widengren, *op. cit.*, 1965, pp. 243—283. 参照。
- 44) P. Grimal, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, 1963: 3, p. 466b. 参照。
- 45) P. Grimal, *op. cit.*, p. 73. 参照。
- 46) M. Burkolter, *op. cit.*, 1981, p. 125. 参照。
- 47) P. Grimal, *op. cit.*, p. 477. 参照。

- 48) P. Grimal, op. cit., p. 110. 参照。
- 49) E. Kuester, Die Schlange in der griechischen Kunst und Religion, 1913, pp. 105 f. 参照。
- 50) P. Grimal, op. cit., p. 73. 参照。
- 51) P. Grimal, op. cit., p. 41b. 参照。
- 52) J. Chevalier, A. Gheerbrant, Dictionnaire des symboles, 1974, vol. 4, pp. 66 f. 参照。
- 53) M. Smith (ed.), The Dragon, 1977, p. 49. 参照。
- 54) P. Grimal, op. cit., p. 129b. 参照。
- 55) H. W. Haussig, Wörterbuch der Mythologie, vol. 2, Götter und Mythen im Alten Europa, 1973, p. XVI. 参照。
- 56) H. W. Haussig (ed.), WBM 2, 1973, p. 70. 参照。
- 57) A. Olrik, Ragnarök, 1922, pp. 56 f. 参照。
- 58) F. Wild, Drachen im Beowulf und andere Drachen, in: Österreichische Akademie der Wissenschaften, Phil.-Hist. Klasse, Sitzungsberichte, Bd. 238, 5. Abh. 1962, p. 36. 参照。
- 59) E. Peterich, Götter und Helden der Germanen, 1937, p. 93. 参照。
- 60) F. Wild, op. cit., p. 48 f. と note 182. 参照。
- 61) J. De Vries, Altgermanische Religion, vol. 2, 1937, pp. 162, 174. 参照。
- 62) U. Steffen, Drachenkampf: Der Mythos vom Bösen, 1984, p. 218. 参照。
- 63) U. Steffen, op. cit., p. 63.; E. Moltmann-Wendel, Das Land, wo Milch und Honig fließt. Perspektiven einer feministischen Theologie, 1985, p. 116. 参照。
- 64) U. Steffen, op. cit., pp. 109 ff. 参照。
- 65) U. Steffen, op. cit., p. 219. 参照。
- 66) U. Steffen, op. cit., pp. 221 f. 参照。
- 67) U. Steffen, op. cit., pp. 226 f. 参照。
- 68) U. Steffen, op. cit., p. 64. 参照。
- 69) U. Steffen, op. cit., pp. 233 f. 参照。
- 70) U. Steffen, op. cit., pp. 234 ff. 参照。
- 71) U. Steffen, op. cit., pp. 237 ff. 参照。
- 72) U. Steffen, op. cit., p. 229 f. 参照。
- 73) E. Moltmann-Wendel, op. cit., p. 230. 参照。
- 74) U. Steffen, op. cit., p. 230. 参照。
- 75) J. Allen, J. Griffiths, The Book of the Dragon, 1979, pp. 67 ff. 参照。
- 76) G. Sholem, Kabbalah, 1974, p. 271 f. 参照。
- 77) M. Eliade, Histoire des croyances et des idées religieuses, vol. 2, 1978, p. 20. 参照。

- 78) W. Eichhorn, *Die Religionen Chinas*, 1973, p. 68. 参照。
- 79) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), p. 123. 参照。
- 80) W. Eberhard, *Lokalkulturen im Alten China*, part I, 1942, p. 136. 参照。
- 81) W. Eichhorn, op. cit., p. 68. 参照。
- 82) E. Ishida, *The Kappa Legend*, 1950, pp. 105 f. 参照。
- 83) W. Eberhard, *Typen chinesischer Volksmärchen*, 1937, pp. 135—139 (川の神とのたたかい I, II). 参照。
- 84) J. Bredon, J. Mitrophanow, *The Moon Year*, 1927, p. 348. 参照。
- 85) W. Eberhard, op. cit., 1937, pp. 144 f. 参照。
- 86) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), pp. 45 f. 参照。
- 87) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), pp. 47 f. 参照。
- 88) F. Vos, *Die Religionen Koreas*, 1977, pp. 112 f. 参照。
- 89) N. Matsumoto, *Essai sur la mythologie japonaise*, 1928, p. 46.; E. Ishida, op. cit., p. 89.; C. Ouwehand, 須佐之男命に関する解説, in: *Monumenta Nipponica*, vol. 14, nos. 3/4, 1958/59, pp. 148—155. 参照。彼は K. Higo に沿って自分の論証をしている。
- 90) K. Florenz, *Die historischen Quellen der Shinto-Religion*, 1919, pp. 290 f. 参照。
- 91) K. Florenz, op. cit., p. 273. 参照。
- 92) K. Seki, *Types of Japanese Folktales*, 1966, p. 70 f. 参照。
- 93) H. Bohner, No. *Die einzelnen No*, 1956, p. 14. 参照。
- 94) A. Rahlfs (ed.), *Septuaginta*, vol. II, 1935, p. 586.; O. Kaiser, op. cit., 1973, p. 44. 参照。
- 95) E. Hennecke, *Neutestamentliche Apokryphen*, 1904, p. 161. 参照。
- 96) M. Lurker, *Wörterbuch biblischer Bilder und Symbole*, 1973, p. 270. 参照。
- 97) F. Cabrol, H. Leclercq (eds.), *Dictionnaire d'archéologie chrétienne et de liturgie*, tome 15 (I), 1950, コラム1355. 参照。
- 98) E.R. Goodenough, *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, vol. 2, 1953, pp. 220 f., 248 f., 262 f. 参照。
- 99) E.R. Goodenough, op. cit., vol. 4, 1954, p. 18 f. 参照。
- 100) F. Cabrol, H. Leclercq (eds.), op. cit., tome 15 (I), 1950, コラム1354. 参照。
- 101) F. Wild, op. cit., pp. 38 f. 参照。
- 102) F. Wild, op. cit., p. 8.; F. Klauser (ed.), *Reallexikon für Antike und Christentum*, vol. 7, コラム697 f. 参照。
- 103) F. Klauser (ed.), op. cit., vol. 7, コラム690. 参照。
- 104) F. Wild, op. cit., pp. 44 ff. 参照。
- 105) F. Wild, op. cit., pp. 45 f. 参照。

- 106) Encyclopaedia Britannica, vol. 7, 1969, p. 623. 参照。
- 107) F. Wild, op. cit., p. 47. 参照。
- 108) Encyclopaedia Britannica, vol. 7, 1969, p. 623. 参照。
- 109) O.A. Erich, R. Beitzl (eds.), Wörterbuch der Deutschen Volkskunde, 1981, p. 710. 参照。
- 110) M. Burkolter, op. cit., 1981, pp. 55 f. 参照。
- 111) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), pp. 115, 118 f., 153 f., 174 f. 参照。;  
F. Vos, op. cit., p. 121.
- 112) W. Eberhard, Beiträge zur kosmologischen Spekulation Chinas in der Han-Zeit,  
in: Baessler-Archiv, 16, 1—2, 1933, pp. 31, 36. 参照。
- 113) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), p. 148. 参照。
- 114) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), pp. 146 ff. 参照。
- 115) J.P. Vogel, Indian Serpent Lore, 1926. 参照。
- 116) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), p. 10. 参照。
- 117) M.W. De Visser, op. cit., 1969 (1913; 1), p. 3. 参照。
- 118) J.P. Vogel, op. cit., 1926, p. 133. 参照。
- 119) M. Burkolter, op. cit., 1981, pp. 155 ff. 参照。
- 120) K. Galling (ed.), RGG, vol. 5, 1961, コラム745 ff. 参照。
- 121) U. Steffen, op. cit., p. 248. 参照。
- 122) G. Widengren, op. cit., 1965, pp. 75 f. 参照。
- 123) R. Schaerf, Die Gestalt des Satans im Alten Testament, in: C.G. Jung, Symbolik des Geistes, 1951, p. 276. 参照。
- 124) D. Perkin (ed.), The Anthropology of Evil, 1985, p. 35. 参照。
- 125) U. Steffen, op. cit., p. 115. 参照。
- 126) U. Steffen, op. cit., pp. 115 f. 参照。

(附記) 本論文中に中国語で出てくる名詞の翻訳, ならびにその表記の仕方については, 本学, 商業部の太田進教授の御教示を得た。